

好き夢

令和七年を迎えます。謹んで新年のお慶びを申し上げます。また、思い起こせば昨年の一月一日には能登半島を大地震が襲いました。更に豪雨の被害もありました。お身内を亡くされ喪中の方々にはお見舞い申し上げます。

令和七年の歌会始の勅題は「夢」だそうです。「夢」という字には、いろんな意味があります。「夢」を『広辞苑』で調べると、四つの意味があります。

①睡眠中にもつ幻覚。ふつう目覚めた後に

のではなく、実際に正夢にしなければならぬということです。

寺では、人が亡くなったときや、亡くなった方をしのぶ折りに、床の間に「夢」と書いた軸を掛けることがあります。この場合の「夢」は、はかないという意味です。

『金剛般若経』には「一切有為の法は夢幻泡影の如く、露の如くまた電の如し」という言葉があります。この世のあらゆるものは、夢の如く幻の如く、もろくはかなく移りゆくものだというのです。

太閤秀吉の辞世と伝えられる「露と落ち露と消えにし 我が身かな 浪速のことも夢のまた夢」という「夢」もまたはかないことを表しています。

睡眠中に見る夢というと、正月に見る「初

意識される。②はかない、頼みがたいもの。たとえ。夢幻。③空想的な願望。心のまよい。迷夢。④将来実現したい願い。理想。という四つです。

人生、夢をもつことが大事だという場合の「夢」は、④の実現したい願いのことです。プロ野球で日本代表監督を務めWBC優勝に導いた栗山英樹さんは、よく「夢は正夢」と揮毫されていますが、これはまさに将来実現したい願いです。それを夢のまま終わらせる



夢」があります。初夢には、古来「一富士二鷹三茄子」が縁起が良いと言われています。特に、新年の初夢にこれらを見ると縁起が良いと言われます。

「聖人に夢無し」という言葉もあります。『莊子』にある言葉で、聖人は「其の寝るや夢無し、其の覚むるや憂い無し」と説かれています。聖人は寝ても夢にうなされることなく、覚めても憂いに苦しむこともないという意味です。

「聖人に夢無し」と言いながらも、昔の高僧にも夢の話はよく出てきます。夢窓国師は、夢に禅宗の寺を訪ね、そして達磨大師の掛け軸をいただいたことから、禅宗に転向するようになったと伝えられています。夢の中で啓示を受けたのです。

白隠禅師が七十九歳のときにも夢にまつ



わる話が残されています。衰弱と老いが重なって、さすがの白隠禅師もこのままお亡くなりになるのではと思われていた頃でした。そんなときに白隠禅師は夢を見ました。その夢の中には、かつて指導を受けた正受老人をはじめ、昔の祖師方がずらっと並んでいました。その祖師方がこんな話をしていました。ある和尚が「今の修行者たちはよく修行をしているけれども、ある二文字が足りない。この二文字が足りないがためにだめである」と言うと、皆が「そうだな、その二文字が足りない」と同意をしました。その中の別の和尚が「その二文字とは何であるか」と聞くと、それは「勇猛」の二文字だということです。この夢を見た白隠禅師は「そうか、『勇猛』の二文字が足りなかったのか。私はまだあなたたちの中に入るには早いぞ」と言って目が覚めた

というのです。そして、それから元気になって八十四歳でお亡くなりになるまで、いろいろな場所から頼まれてお説法に行き、最後まで活躍をしながら原の松蔭寺で静かに亡くなりました。「夢」からの啓示を現実に活かした話です。

昨年の夏は厳しい暑さでした。八月の終わり頃、私は曹洞宗の青山俊董老師に招かれて、老師が出家された寺である、長野県塩尻の無量寺にお参りしました。「禅の集い 信濃 結集」という一般在家の方の修行で、私は九十分の講座を三回務めさせてもらいました。青山老師は九十一歳でいらっしゃいますが、お元気で講話なされ、また私の拙い話も前列にお座りになってお聞きくださって恐縮しました。

青山老師は、愛知県一宮にお生まれになって、五歳のときに塩尻の無量寺にお入りになっています。十五歳で得度されて、愛知専門尼僧堂で修行され、駒澤大学、大学院を卒業されました。四十二歳で無量寺の住職になられ、更に四十三歳で愛知専門尼僧堂の堂長に就任なされています。令和四年には大本山総持寺の西堂にも就任されているのです。青山老師は茶道にも造形が深い方です。『南方録』に「掛物より第一の道具はなし」という言葉がありますが、人を迎えるには、どんな掛け軸を出すか、とても心を使うものです。

今回も私が来ることにお気遣いくださり、本堂に入ったところには、臨済宗妙心寺派の管長を務められた古川大航老師の墨蹟を掛けてくださっていました。それから私の控え

室には、松原泰道先生の「花無心、蝶を招く」の書を掛けてくださり、その途中に花園大学の学長を務められた大森曹玄老師の書を掛けてくださったのでした。それぞれのご配慮には頭のさがる思いでありました。

それからもうひとつ、一般の方々の控え室には「好夢」という書が掛けられていました。大雄山最乗寺の山主であり、総持寺の副貫首でもあられた余語翠巖老師の書でした。その「好夢」という言葉は『法華経』の安樂行品にある言葉だと青山老師から教わりました。好夢は「好き夢」です。どんな好き夢かというと安樂行品には、次のように書かれています。春秋社『現代日本語訳 法華経』から正木晃先生の現代語訳を引用しましょう。

「あなたは、未来世において、無限大の智慧をもつ如来になるでしょう。あなたがおさめ

さい』と言うでしょう。また、自分が山林の中にいて、正しい修行にはげみ、もろもろの領域にわたる真実のすがたを見極め、深い瞑想に入って、その中で全宇宙にあまねくおられる如来たちにお会いするでしょう。あなたがお会いする如来たちは、からだを金色に輝かせ、三十二相をおもちです。この三十二相は、その一つひとつが、それぞれ過去世における百もの福德の結果として獲得されたものなのです。あなたは如来たちから教えを聞き、聞いた教えを、こんどはほかの人々のために説くでしょう。以上が、あなたが見るすばらしい夢の体験です。」というのです。

ここにも『法華経』で説かれる大事な教えがございます。誰しも人は仏になれるということです。そのために教えを聞こうと願うのです。深く心を静めて十方の仏さまにお目に



る仏国土は、どこもかしこも清らかで、その広いことといったら比類ありません。そこには、出家僧と尼僧と男女の在家修行者がいて、あなたにむかつて合掌し、『説法してくだ

かかることができません。素晴らしい仏さまに出会い、教えを聞いて学び、更に人々のために教えを説いてゆくのです。

好夢とは、こんな素晴らしい夢なのです。無量寺で熱心に仏道を学ぶ皆様と青山老師のお話をうかがっていると、こうして仏道を学んでいる今こここそ、好き夢のまっただ中ではないかと思いました。

新しい年を迎えると、どうか良い年であるようにと誰しも願います。良い年にするには、やはり良き人に出会い、良き教えを聞いて学ぶことが一番大事です。青山老師は、人生に起こるいろいろなことを、「好き夢」として受け止めて生きることだと説かれていました。自分にとって都合のいいことも、そうでないことも「好き夢」と受け止めて、更に良き教えに触れて学んでまいりましょう。